

Title	インディアスの発見とルネサンス (1)
Sub Title	El descubrimiento de las Indias y el Renacimiento (1)
Author	瀧本, 佳容子(Takimoto, Kayoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.20 (2005.) ,p.97- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20050000-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インディアスの発見とルネサンス（1）

瀧本佳容子

アフリカの地よ、東洋の海よ、今からすでに感じとれ、
全世界の人々を驚嘆させるほど大きな重圧を。
陛下の雄々しい戦士らとその比類のない偉業の重圧をだ。
(ルイス・ヴァス・デ・カモンイス『ウズ・ルジ
アダス』〔1572年〕「第一の詩15」池上岑夫訳)

1. はじめに：大航海時代叢書の問いかけ

いと高き陛下、世界を創造なさった御方の受肉と帰天を除くと、地球の創造以来最大の出来事といえば、新世界とも呼ばれるインディアスの発見でございます。新しく発見され、彼地が廣大無辺で、ヨーロッパ、アフリカ、アジアを含む旧世界にほぼ匹敵するほどの広さということだけで「新しい」と申すのではございません。彼地の一事が万事、我らのものと大きく異なっていることから「新しい」と言えるのでございます。

メキシコ征服者エルナン・コルテース（Hernán Cortés, 1485-1547年）の家の礼拝堂付司祭F. ロペス・デ・ゴマラ（Francisco López de Gómara, 1511-66?年）は、コルテース礼賛の書であるその著書『インディアス全史』（*Historia general de las Indias*, Zaragoza, 1552年）の冒頭を上のような言葉で飾った⁽¹⁾。この言葉を捧げられたのは、当時のスペイン国王カルロス1

世（Carlos I, 在位1516-56年）である。クリストバル・コロン（Cristóbal Colón, 1451-1506年）の第1次航海（1492年10月12日-1493年3月15日）から半世紀の間に進められたインディアスの征服事業の拡大は、ゴマラをはじめとするスペイン人に「新世界」の発見・征服の担い手たる完璧な自負と誇りを与えていた。そして「新世界」とは、メキシコに与えられた「新スペイン」（Nueva España）という名称などが示すように、新たな=もう1つのスペインの建設に他ならなかった。

15世紀初頭にはじまるヨーロッパ人の数々の航海、地理的発見、征服により、それ以前には互いに存在を知らなかった異なる地域の人びとが相知り合い、世界は一つに結び付けられた。同時にそれは、欧米諸国によって全世界が秩序づけられる過程でもあった。インディアスに関するあらゆる表象や言説が生み出される過程は、ヨーロッパ人を主体とし彼ら以外を他者とする世界観が構築されていく過程に他ならなかった。もちろんこれは、西半球のみにとどまる事態ではなかった。スペインに先立って着手されたポルトガルによるアフリカ・アジアへの進出を嚆矢とし、後にはオランダ、イギリス、フランスなどのヨーロッパ列強が——そして19世紀後半からは、かつて「インディアス」を構成する地域のひとつだったアメリカ合衆国も太平洋を超えて加わって——、東半球の至る所へ進出した。こうした世界規模での植民地政策の展開を通じ、欧米諸国が政治・経済の主導権を握ると同時に文化的にも優位だと見なされるに至る。その中で日本は、2世紀半にわたる鎖国という世界史上でも稀な道を選択したうえ、開国後は急速な近代化=欧米化を推進した。そして幾多の戦争で欧米列強とわたり合おうと試みた挙句、第2次世界大戦における敗戦後は米合衆国の強い影響下でまたもや急激な変化を遂げた。インディアスの発見は、世界の歴史の方向を決定づけた。その意味で、「地球の創造以来最大の出来事」とい

(1) 本稿への引用は、清水憲男訳『拡がりゆく視圏』アンソロジー 新世界の挑戦 3, 岩波書店, 1995年, 7頁。

うゴマラの言葉は今日でも有効だといえる。

そして、ヨーロッパからアフリカ大陸を周航しアジアを目指して進められた東半球への航海よりは、西方のインディアス発見・征服がもたらした衝撃の方がより深刻だったといえる。東半球がヨーロッパ人にとってある程度既知の土地だったのに対し、インディアスはコロンの航海以前にはヨーロッパ人にその存在を全く知られていなかったからである。この新しい土地は、コロンの第1次航海からわずか15年後の1507年に発行されたドイツの人文学者ヴァルトゼーミュラー (Martin Waldseemüller, 1470?-1518年) 作成の世界地図 (*Universalis Cosmographia secundum Ptholomaei Traditionem et Americi Vespucii aliorumque lustrations*) において独立した大陸として描かれ、「アメリカ」という名称を与えられた。こうした地理学的認識と並行してヨーロッパ人たちは、インディアスの自然と住民およびそこで起こる出来事を膨大な数の多岐にわたる文書として書き残していった。

ヨーロッパ人の到来を脅威と捉え、これに対し鎖国という特異な反応を示した日本では、1960年代より大航海時代に書かれた記録の大きかりな翻訳・出版作業が行われた。岩波書店刊の大航海時代叢書である。第Ⅰ期(全11巻・別巻1, 1965-70年), 第Ⅱ期(全25巻, 1979-92年), エクストラ・シリーズ(全5巻, 1985-87年) という陣容の壮大なコレクションは、1992年にB. デ・ラス・カサス (Bartolomé de Las Casas, 1484-1566年) の『インディアス史』(*Historia de las Indias*, 1559年ごろ成立) 最終巻の刊行をもって完結した。著者の総数は約70人, その国籍はスペイン, ポルトガルのみならず, イタリア, フランス, イギリス, オランダという多国におよび, 対象となった地域はヨーロッパ西方のインディアス, そしてアフリカ, アジアという広がりを持つ。

この叢書は, 単なる翻訳・出版事業にとどまらない。1965年から約30年におよぶ刊行過程で当初の刊行意図も絶えざる批判と検討にさらされ, そこから新たな問題提起が生まれていったからだ。それを如実に物語るのが, 第Ⅰ期と第Ⅱ期の各巻に付された「通信」のうち特に後者である。13年に

わたる第Ⅱ期刊行期間中、大航海時代叢書編集部により計11編集されたこの「通信」から、叢書の存在意義が刊行の進捗と共に膨らんでいく過程がまざまざと理解できる。1965年の第Ⅰ期刊行開始当初の企画構想は、「敗戦後、新たな世界史像を創り出そうとする国民の多くが抱いた課題意識に呼応したものであり、直接的には一九六〇年を相前後するアジア・アフリカ諸民族の独立やそれらに伴う世界史の構造変化に促迫されたもの」——ここに、欧米諸国の植民地争奪合戦の最も完全な縮図であるカリブ海地域におけるキューバ革命および諸国家の独立を付け加えておきたい——だった。そして、「ヨーロッパ近代と、その形成過程の中で形をとってきたヨーロッパ中心史観を、さらには明治の開国以降それに追従してきた日本人の世界史認識のありようを根本的に問い直そうとの願い」⁽²⁾が込められていた。このような認識に基づいたうえで第Ⅱ期「通信」では、既刊のあるいは刊行途上の巻に収められた諸記録の間の有機的関連が分析され、そこに共通して見られる問題が浮き彫りにされていった。

そして、コロンブスの第1次航海500周年とラス・カサス『インディアス史』最終巻刊行による第Ⅱ期の完結を目前にした1991年末、大航海時代叢書編集部は『コロンブスに現代を読む コロンブス新世界到達500年』と題された出版目録を編集し、そこで第Ⅱ期「通信」で提起した諸問題を直接に反映した新しいシリーズ『アンソロジー 新世界の挑戦』全13巻の刊行を予告した。目録『コロンブスに現代を読む』自体が、大航海時代叢書編集部の抱いている問題意識を具現化した1つの作品だった。この目録で編集部は大航海時代叢書の意義をあらためて述べ、そのさらなる深化へ読者をいざなういくつかのテーマを設定してその各々に対応した文献案内・解題を付した。

(2) 大航海時代叢書編集部「〈コロンブス問題〉へのさまざまなアプローチを」『コロンブスに現代を読む コロンブス新世界到達500年』岩波書店、1991年、頁番号なし。

大航海時代叢書編集部は、叢書を「ヨーロッパ思想史の巨大な地下水脈」をあらわにする「十五世紀以降非ヨーロッパ世界に進出したヨーロッパ人がみせた認識活動の総体」と位置づけると同時に、ヨーロッパ人が「世界に新秩序を造出しようとする課題に突き動かされて、彼らの前に立ち現れた諸民族を客体視し、その自然と文化の全体を認識できる方法を鍛え上げてゆく」過程の結実だと捉えた。そして、「そのしたたかな力量に驚嘆するとともに、片や発見＝征服と同時に始まった彼らと他者との関係の持ち方そのものにむけられたラディカルな自己批判活動と、それが枯れることなく継承されてゆく精神風土に引きつけられる」と述べている。こうした認識に達したのは、編集部こそが叢書の刊行を通じて常に自らの仕事に対する自己批判を行ってきた証しだといえる。1992年刊行開始の『アンソロジー 新世界の挑戦』はそうした精神的営為の成果だった。これは、叢書第Ⅱ期の完結が視野に入った時点で編集部が確信をもって抱いていた、「これら諸記録を一つの群れとして読むならば」「相互に対立・拮抗し合う書き手の激しい緊張関係に気づかされる」という問題意識に基づいていた⁽³⁾。編集部は、密度の高い有機的関連を示しつつも激しい緊張や対立も呈するダイナミズムに満ちたこの「一つの群れ」から、「旧世界は予想を超えた新しい問いをつきつけられ」、「自覚するとならないとのかかわりなく〈新世界の挑戦〉を受けて立たざるを得なく」なっていたという問題を読み取った⁽⁴⁾。すなわち、ヨーロッパ人を書き手としインディオは客体としてしか記述されていないはずの諸記録は、ヨーロッパ人による征服に対しインディオが積極的・主体的な反応（＝反抗）を示したからこそ成立したという、ヨーロッパ中心史観にとっては逆説的な事実があったのだ。新しいア

(3) 以上カッコ内は、大航海時代叢書編集部「〈コロンブス問題〉へのさまざまなアプローチを」『コロンブスに現代を読む コロンブス新世界到達500年』岩波書店、1991年、頁番号なし。

(4) 『アンソロジー 新世界の挑戦』全巻冒頭に付された「刊行にあたって」、v頁。

ンソロジーは、編集部のごうした認識に基づき、インディオがヨーロッパ人に突きつけた主体的反応とは何だったかを各巻のテーマとして編集された。インディアス発見という問題に関してここまでの深まりをもって挑んだ刊行物は世界でも類を見ない。ユーラシア大陸の果てたところに位置する小さな島国でありながら、ヨーロッパの脅威に敏感すぎるほど敏感な反応を示し、明治以後も同じ敏感さでもって欧米追従をおさおさ怠らぬ日本においてこそ可能になった、日本の歴史的歩みに対する痛烈な批判から生じた試みだといえる。

大航海時代叢書編集部の以上のような営為が世に出ると並行し、これに応える仕事も現れた。最も早いのは1977年の石原保徳氏の論文「世界史の〈深さ〉について——16世紀と〈西インド〉の投げかけるもの——」である⁽⁵⁾。石原氏は、インディアス発見・征服の諸記録が生まれた経緯を「大西洋圏とでも呼ぶべき歴史空間に一個の新秩序を創出することを目指した」、「ヨーロッパが世界のヨーロッパとなっていく起点、つまり近代の発端を画す運動」⁽⁶⁾と捉え、インディオを発見・征服される客体としてしか認識しなかった16世紀のヨーロッパ人の中で、この歴史観にただ一人真っ向から対立したラス・カサスをモチーフとする仕事を次々と発表した。そして現在では、ヨーロッパ中心史観とこれを無批判に受容してきた日本における歴史研究への批判を展開すると同時に新たな世界史像の描出を提起している⁽⁷⁾。このようなヨーロッパ中心史観へのアンチテーゼとして、青木書店刊『南北アメリカの500年』全5巻（1992-93年）も挙げられる。

(5) 『歴史学研究』1977年1月号、14-26, 49頁。

(6) 石原保徳「近代の発端と大西洋人の誕生」『歴史学研究』1986年3月号、39頁。

(7) 石原氏の多数の仕事のうちラス・カサスをモチーフとしたものとしては、特に『インディアスの発見 ラス・カサスを読む』田畑書店、1980年、および、ラス・カサス著『インディアス破壊を弾劾する簡略なる陳述』現代企画室、1987年、の翻訳・解説・年表が挙げられる。また、新たな世界史像の提示は『世界史への道』前後篇、丸善ライブラリー、1999年。

導入部分が長くなったが、本稿は、中世末期から近代初頭にかけてのスペイン文学史を目下の研究課題としている筆者が、上に述べてきたような日本における「大西洋圏」問題の展開に刺激を受け、そこで提起された問題のいくつかは何らかの形で応えようと試みたものである。具体的には、15世紀のスペインにおけるイタリア・ルネサンスの影響とその展開を研究していく過程で得られたいくつかの知見をもって、「大西洋圏」問題に関する議論への参画を目指したものである。以下で取り上げる問題はまず、15世紀のスペイン・カスティージャ王国でイタリア・ルネサンスの影響の下に起こった俗語文芸の一般化、そして俗語の台頭と並行して生じた自国文化普遍化の志向である。次いで、同じく15世紀のカスティージャにおける歴史記述の問題、そして最後に人文主義とルネサンスの理想について述べる⁽⁸⁾。

2. スペイン・ルネサンス：文芸の大衆化と普遍化の意志

インディアス関係の記録で現存する最古のものは、コロンが第1次航海からの帰途したためた1493年3月4日付アラゴン王国経理官ルイス・デ・サンタンヘル宛書簡である⁽⁹⁾。

注目すべきは、この書簡がただちに印刷に付せられて人口に膾炙し、1493年から97年までのわずか4年の間に17もの版が出回ったことである。さらに、そのうちオリジナルのスペイン語に依拠したものは2つで、他はドイツ語、イタリア語およびラテン語への翻訳であり、アントウエルペン、パリ、バーゼル、ローマおよびフィレンツェで出版された⁽¹⁰⁾。インディアス発見という知らせの衝撃の大きさからして同報告書簡の人気ぶりは当然だといえるが、スペインへの印刷機到来（1471年あるいは72年）からわずか20年の時点で、オリジナル文書の提供者・仲介者・翻訳者・印刷業者の間に

(8) 歴史記述および人文主義とルネサンスの理想については、『日吉紀要・人文科学』21号（次号）に掲載予定。

国際的ネットワークができあがり迅速な連携が行われていたことがわかる。

他にも、アメリゴ・ヴェスプッチ (Amerigo Vespucci, 1454-1512年) の『新世界』 (*Mundus Novus*) は1503年にパリとフィレンツェにおいてラテン語で出版された後、たちまちイタリア語、ドイツ語、オランダ語、フランス語などに訳され版を重ねた。1505年あるいは1506年にはフィレンツェにおいて、同じヴェスプッチの『四回の航海』 (*Lettera di Amerigo Vespucci delle isole nuouamente trouate in quattro suoi viaggi*) がイタリア語で出版されたが、その直後ラテン語訳がサン・ディエ・アカデミー (Académie de Saint-Dié) 編『世界誌入門』 (*Cosmographiae Introductio*) にヴァルトゼーミュラー作成の世界地図と共に収められた⁽¹⁾。一方、当時カステージャ王国に仕え、第1次航海から帰還後のコロンにも直接会見したイタリアの人文主義者

(9) この報告書簡より早い時期に成立した文書として、コロンの第1次航海日誌があるが、これは1825年に至って初めて Fernández de Navarrete, Martín (ed.), *Colección de los viajes y descubrimientos que hicieron por mar los españoles desde fines del siglo XV*, Madrid, Imprenta Nacional, 1825-37に所収・刊行された (林屋永吉による邦訳は、『コロンブス航海誌』岩波書店, 1977年)。さらにコロンの航海誌に関し最も重要なのは、現存する唯一の写本がコロンによるオリジナルではなくラス・カサスの手による部分的転写であり、これがオリジナルの単なる抜粋や要約ではないという点である。インディアスに関する記録を残した16世紀のヨーロッパ人の中にあつて、コロンの行為および思考をその後も継続されていくインディアス破壊の発端だと見なしていた唯一の人物であるラス・カサスが、自らの歴史観に即して編纂した作品だと見なさなければならない。この問題については、石原保徳『インディアスの発見 ラス・カサスを読む』田畑書店, 1980年, 42-70頁を参照されたい。

(10) 林屋永吉「コロン第一次航海の記録 解説」『航海の記録』大航海時代叢書第Ⅰ期-I, 岩波書店, 1965年, 56頁。Sáinz de medrano Arce, Luis, “Reencuentro con los cronistas de Indias”, en *Anales de Literatura Hispanoamericana*, N^o. 6, 1977, p. 22.

(11) 増田義郎「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集 解説」『航海の記録』大航海時代叢書第Ⅰ期-I, 岩波書店, 1965年, 251-53頁。

ペドロ・マルティル・デ・アングレリーア（Pedro Mártir de Anglería, 1456/57–1526年、イタリア名 Pietro Martire d'Anghiera）は、1493年11月13日付でアスカニオ・スフォルツァ枢機卿に宛てて報告書簡をしたため、これは1511年にセビージャで『新世界十巻の書』（*De Orbe Novo Decadas*）に収められて世に出た。エルナン・コルテスがメキシコから送った報告書簡で現存する4通のうち特に最初の2通も直ちに印刷に付された。1520年10月30日付のものは、1522年11月にセビージャで刊行され、翌1523年にはサラゴサで別の版が、そしてフランス語訳が出された。さらに1524年にはラテン語とイタリア語に、1550年にはドイツ語に訳された。1522年5月5日付の書簡は、1523年3月にセビージャで最初の版が出たあと、1524年にラテン語訳とフランス語訳が、そして1550年にドイツ語訳が出た¹²⁾。

もっと大部の著作も同様である。例えば、本稿冒頭で言及したロペス・デ・ゴマラの『インディアス全史』はモンテーニュに影響を与えたことで知られるが、1552年にサラゴサで初版が、その短縮版が翌1553年に出版された後さらに2年間に6つのスペイン語版が出た。一方、1556年から20年の間に6種のイタリア語版、1569年から18年の間に5種のフランス語版、そして1578年と1596年に2種の英語版が出版されている。同じ1550年代にセビージャで初版が出たシエサ・デ・レオン（Pedro Cieza de León, 1518–84年）の『ペルー誌第1部』（*Parte primera de la crónica del Perú*, 1553年）も1554年にアントウェルペンで再版が、そして1555年からの約20年間に5種のイタリア語訳が出版された。そして、「アメリカ世界というものを、真にヨーロッパ思想の大きな枠組のなかに包摂するという作業の完成」であり、ヨーロッパの「一世紀にわたる思想的営為の頂点」¹³⁾と賞されるホセー・デ・アコスタ（José de Acosta, 1539–1600年）の『新大陸自

(12) 増田義郎「コルテス 報告書簡 解題」『征服者と新世界』大航海時代叢書 第Ⅱ期-12、岩波書店、1980年、116–18頁。

(13) エリオット、J. H.（越智武臣、川北稔訳）『旧世界と新世界 1492–1650』岩波書店、1975年、61頁。

然文化史』(*Historia natural y moral de las Indias*)は、1589年に全7巻中の最初の2巻のラテン語版がサラマンカで出版された後、1595年サラマンカで第2版が、1596年ケルンで第3版が出た。その間にスペイン語による原典の全巻が1590年セビージャで出版されると、1597年にはイタリア語、1598年にはフランス語、オランダ語、ドイツ語へ、1602年にはラテン語、そして1604年には英語へと翻訳が矢継ぎ早に行われた^[4]。

こうした活発かつ迅速な翻訳・出版の動きの中で注意を惹くのは、まず第一に、コロンやコルテスの書簡のようなわずか数枚のものが出版の対象となったことである。ヴェスプッチの『新世界』もロレンツォ・デ・メディチ(Lorenzo de' Medici, 1448-92年)宛の書簡であり、『四回の航海』も書簡の形を取ったものである。また、上に挙げた大部の歴史書もそれぞれが国王などの権力者に宛てた献辞が冒頭に付され、執筆意図および献呈理由が述べられている。第二に、それぞれの書物はある特定の人物に捧げられながらも、すべて実際は翻訳・出版を通して不特定多数の読者に読まれることを想定していたと考えてよい。そして一般読者がまず目にする権力者の名前は、著作の重要性および正統性の証明に他ならなかった。

第一の問題、つまり書簡が作品の地位を与えられ印刷・出版の対象となるという現象は、人文主義とルネサンスを経験したヨーロッパで14世紀からすでに始まっていた。具体的には、修辞学を規範とした「書簡作文法」(*artes dictaminis*)の一般への普及、そしてペトラルカ(Francesco Petrarca, 1304-74年)によりヨーロッパに復活したキケロ(Marcus Tullius Cicero, 前106-43年)の『親愛書簡』(*Epistulae ad familiares*, 前44年)の人文主義者の間における普及およびこれの俗語における受容であった。そし

[4] 増田義郎「アコスタ 新大陸自然文化史 解説 新大陸記録者の意味」J. デ・アコスタ(増田義郎訳)『新大陸自然文化史 上』大航海時代叢書第I期-Ⅲ、岩波書店、1966年、45-50頁。

てカステイージャ語（＝スペイン語）文学においては15世紀に書簡が1つのジャンルと呼べるほど文学性を高め、散文における他のジャンルを生み出した。第二の問題、つまり印刷術の発明・普及のおよぼした影響についてはあらためて指摘するまでもないが、本稿で指摘しておきたいのは、第一のカステイージャ語における書簡の発達と密接に絡んで促された、文芸愛好家・知識人の自意識の変化と大衆化である。

まず書簡に関する問題である。「書簡作文法」は11世紀後半のイタリアで誕生し中世末期までにはヨーロッパ全域に普及した、キケロの定めた修辞学の規範（前置き、事情説明、自説の主張、反論への反駁、および結び）に則って書簡などの文書を作成するための教本である。このようなマニュアルが誕生したのは、イタリアで政治・経済の発展を背景として都市文化が成熟したのに伴って発行される公文書の量が増え、文書作成を専門の生業とする者の需要も増したからである。元来は法律と齟齬を来さない文書の作成を目的としたものだったが、これを通じて相手の説得という修辞学の基本が普及していったといえる。「書簡作文法」は13世紀までに過度な形式主義に陥るが、これを払拭した新傾向のものが出て1240年頃のポローニャで俗語にも応用されるようになった⁽¹⁵⁾。カステイージャ語に応用されるようになったのは13世紀からで、15世紀後半には普及の全盛を迎え⁽¹⁶⁾、カステイージャ語による書簡作成が一般的なものとなった⁽¹⁷⁾。

(15) 岩倉具忠「I 中世」『イタリア文学史』東京大学出版会、1985年、28頁。

(16) Gómez Moreno, A., *España y la Italia de los humanistas. Primeros ecos*, Madrid, Gredos, 1994, p. 194; Lawrance, J. N. H., "Nuevos lectores y nuevos géneros: Apuntes y observaciones sobre la epistolografía en el primer Renacimiento español", en *Literatura en la época del Emperador. Academia Literaria Renacentista*, V, dirigida por V. García de la Concha, Universidad de Salamanca, 1988, p. 97, n. 35.

(17) Copenhagen, C. A., *Letters and Letter Writing in Fifteenth-Century Castile: A Study and Catalogue*, Michigan, University Microfilms International に集められた書簡の数・差出人と宛名人の職業・身分がそれを実証している。

その一方で書簡は、ペトルルカの『身辺雑事書簡』(*Familiarum rerum*)を契機として人文主義者たちの間で別の展開を見せるようになる。1345年にキケロの『親愛書簡』に接したペトルルカは、形式的で有用性を旨とした公文書としての書簡ではなく、明快な文体でユーモアも交えて私的な事からを述べるためのこの「親愛書簡」をヨーロッパに甦らせた。やがて、高位聖職者や王侯貴族の書記あるいは行政官や修辞学教師などを職業としながらもラテン語や哲学の研究を通じて独自の集团的自意識を形成しつつあった人文主義者たちの間で、この「親愛書簡」が交わされるようになった⁽¹⁸⁾。ウィット (R. Witt) が指摘するように14世紀における人文主義の展開が人文主義者たちの私生活の領域にのみ限られていたとすれば⁽¹⁹⁾、「親愛書簡」を通じて彼らは緊密かつ親密な関係を築くことができたといえる。

カステイージャ語においてこの新しいタイプの書簡を始めたのは、ローレンス (J. N. H. Lawrance) によると E. デ・ビジェーナ (Enrique de Villena, 1384-1434年) であるが⁽²⁰⁾、その本格的定着を示すのは1444年に人文主義者でブルゴス司教のアルフォンソ・デ・カルタヘーナ (Alfonso de Cartagena, 1384-1456年) がサンティジャーナ侯イーニゴ・ロペス・デ・メンドーサ (Íñigo López de Mendoza, Marqués de Santillana, 1398-1458年) に宛てた書簡だった。カルタヘーナはここでサンティジャーナ侯に対し「貴族たちは知的営為に携わることで、自分たち自身に対してもまた他者に対しても1つの理想を保ち続けるべきだ」と述べると同時に俗語の簡素さを称え、俗語による文筆活動の必要性を説いた⁽²¹⁾。このカルタヘーナの書簡からわかることは、第一に、俗語が文学作品の執筆にふさわしい洗練に達

(18) Jiménez Calvente, T., *Un siciliano en la España de los Reyes Católicos*. Los Epistolarum familiarium libri XVII de Lucio Marineo Sículo, Universidad de Alcalá de Henares, 2001, p. 76.

(19) Witt, R., "Medieval 'Ars Dictaminis' and the Beginnings of Humanism: a New Construction of the Problem", in *Renaissance Quarterly*, XXXV, 1982, p. 3.

(20) Lawrance, *op. cit.*, p. 85.

していたこと、そして次に文芸を愛好する貴族たちの間ですでに1つの流れともいえる活動が行われ、それが彼ら独自の矜持を支える根柢の1つになっていたことである。さらに、聖職者であり人文主義者であったカルタヘーナがこのような知識人同士の連帯意識を、サンティジャーナ侯に宛てて表明した点も非常に重要である。サンティジャーナ侯は当時の貴族の慣習に従って大学教育を受けていなかったのでラテン語を知らなかった。しかし彼は、イタリアの書籍商と取引をして蔵書を充実させ、古典古代の文学作品の翻訳を奨励する一方、自分自身はカステイージャ語でイタリアの影響を受けた詩を執筆した、カステイージャ語におけるルネサンス的活動の本格的創始者だったからである。

さらに1450年代にはフェルナンド・デ・ラ・トーレ（Fernando de la Torre, 1416?-75年）によって『20の書簡および質問』（*Libro de las veinte cartas e quisiones*, 1455年ごろ）という書簡文学作品が生まれた。これは、当時のカステイージャ国王エンリーケ4世（Enrique IV, 在位1454-74年）、サンティジャーナ侯をはじめとする有力貴族、騎士、聖職者、書記官などの官吏、貴族や無名の女性に宛てた書簡集であり、カステイージャ宮廷を中心に新しいタイプの文芸サークルが形成され、そこでカステイージャ語が優雅で洗練された文学のための言葉として用いられていたことを雄弁に物語る作品である⁽²⁾。しかも、サラマンカ大学で神学を修めたと推測されるデ・ラ・トーレは、アラゴン王子カルロス・デ・ビアーナ（Carlos de Viana, 1421-61年）のために、自由学芸について寓意的に叙述した百科全書『哲学および他の諸学の悦ばしき幻視』（*Visión delectable de la filosofía et de las otras ciencias*, 1430-40年ごろ成立、1485年刊行）を著わした、当

(2) Marichal, J., *La voluntad de estilo. Teoría e historia del ensayismo hispánico*, Barcelona, Seix Barral, 1957, pp. 31-34.

(2) Lawrance, *op. cit.*, pp. 91-94; Pontón Gijón, G., *Correspondencias. Los orígenes del arte epistolar en España*, Madrid, Biblioteca Nueva, pp. 195-98.

時の学問の最先端を知る人物だった²³。平民出身で、王宮官吏となって有力貴族メンドーサ家の庇護を受け、後にイサベル1世（Isabel I, 在位1474-1504年）から王室年代記作者に任命されたフェルナンド・デ・プルガル（Fernando de Pulgar, 1430?-92?年）は『カスティージャ王国顕紳列伝』（1486年刊行）で、貴族と知識人たちの交流の様子を次のように述べている²⁴。

（サンティジャーナ侯は）常に館に博士たちや教師たちを招かれ、ご自分が研究なさっている学問や読書の話をしておられた。（…）そしてご自宅で過ごされる時間の大半をこうしたことに費やしておられた。

また、こうしたサークルに集う者たちの中で「親愛書簡」が交わされていたことも、プルガルが1481年にある友人に宛てて書いた書簡からわかる²⁵。

私は、サンティジャーナ侯イーニゴ・ロペス・デ・メンドーサ閣下、そのご子息のインファンタード公ディエゴ・ウルタード・デ・メンドーサ閣下、バトレスご領主フェルナン・ベレス・デ・グスマーンはじめの立派な貴族や顕人たちが、真実に興味を添える戯れ（*burla*）を交えた機知（*dotorina*）あふれる書簡をお書きになっていたのを見たのです。よろしければ貴方もキケロの（…）『親愛書簡』をお読みにな

²³ クルツイウス, E. R. (南大路振一, 岸本通夫, 中村善也訳) 『ヨーロッパ文学とラテン中世』 みすず書房, 1971年, 564, 789頁。

²⁴ Pulgar, F. de, *Claros varones de Castilla*, edición de R. B. Tate, Madrid, Taurus, 1985, p. 101. カッコ内引用者。

²⁵ Pulgar, F. de, "Letra XXI", en *Letras*, edición de Paola Elia, Pisa, Giardini Editori e Stampatori, 1982, p. 80.

れば、本当のこの間にかかなりの戯れ (burla) が交じっていることがお分かりになるでしょう。

このプルガールは、イタリア・ルネサンスの影響を受けた15世紀カステージャにおける文芸の普及と俗語の台頭の恩恵に存分に浴した人物だった。おそらくトレード市書記官を父に持つであろうプルガールは、大学教育を受けることなく書記養成学校で「書簡作文法」を基本とする書記としての準備教育を受け、フアン2世 (Juan II, 1406-54年) の時代にカステージャ宮廷に書記官として勤め始めた。すでにふれたように、宮廷でサンティジャーナ侯の知己を得てその館にも出入りを許され、サンティジャーナ侯の息子で後に枢機卿となりイサベル1世の治世において大きな影響力をふるったペドロ・ゴンサーレス・デ・メンドーサ (Pedro González de Mendoza, 1428-94年) の庇護を生涯にわたって受けた。エンリーケ4世時代から王の秘書官に任命され、次のイサベル1世からも篤い信頼を寄せられて秘書官や外国への大使をつとめたあと、勅命年代記作者となった。上に述べたようにサンティジャーナ侯が中心となった文芸サークル周辺にも身を置き、古典古代の書物にも親しんでいたことがうかがえる。1484年の書簡では80冊の蔵書を所有していたと述べていることから²⁶⁾、プルガール自身もかなりの蔵書家だったといえる。サンティジャーナ侯の蔵書は死後借金返済のために一部が売却されて約100冊が残った²⁷⁾。イサベル1世は約250冊²⁸⁾、メンドーサ枢機卿は約550冊の蔵書を持っていたが²⁹⁾、

²⁶⁾ Pulgar, F. de, "Letra XXVIII", *ibid.*, p. 104.

²⁷⁾ Kerkhof, M. y Gómez Moreno, A., "Introducción" a las *Obras completas* de Íñigo López de Mendoza, Marqués de Santillana, Barcelona, Planeta, pp. XXI-XXIV.

²⁸⁾ Clemencín, D., *Elogio de la Reina Católica Doña Isabel*, Madrid, Imprenta de I. Sancha, 1821, p. 435.

²⁹⁾ Sánchez Cantón, F. J., *La biblioteca del marqués del Cenete iniciada por el cardenal Mendoza (1470-1523)*, Madrid, C. S. I. C., 1942, pp. 24-26.

王侯貴族とブルガールの経済レベルの差を考慮に入れると、ブルガールの蔵書は決して富裕層のそれにひけを取らないものだったといつてよい。さらに、ブルガール自身も家族・友人・官吏仲間や王侯貴族と「親愛書簡」をやり取りしており、それらは1485年に『書簡集』としてまとめられカステージャ王国における最も初期の印刷物の1つとして刊行された。他に主な著作としてすでに言及した『カステージャ王国顕紳列伝』および『カトリック両王年代記』（*Crónica de los Reyes Católicos*, 1492? 年成立, 1565年刊行）があり、15世紀のカステージャ語散文における第一級の作家として高く評価されている。

このように平民出身で大学教育を受けておらず書記から文人となったブルガールの生涯の背景には、すでに言及した、15世紀のカステージャにおいて人文主義の影響下で展開・普及した俗語による文芸活動があった。王侯貴族に書記官や蔵書係として仕え写本の筆写などを手がけるうちに、自らラテン語からカステージャ語への翻訳を行ったり、カステージャ語による独自の文学作品を著わした者は、ブルガールだけではなかった。単なる書記から文人への転身は、イタリア・ルネサンスの影響を受けた15世紀のカステージャ社会における1つの類型として捉えることができる。そして、書物に親しんで所有する一方で書物の編纂や書簡執筆を行うなどの、事務目的ではなく文芸として読み書きを行う活動も15世紀にある程度の大衆化をみたといつてよい⁽³⁰⁾。

ブルガールは「書簡作成法」を通じて説得力のある戦略的言辞を弄す術を身に付けたわけだが、彼の『書簡集』や先に言及したデ・ラ・トーレの作品に代表される書簡文学は、15世紀におけるカステージャ語の台頭を物語ると同時に、人文主義的理想のカステージャ語における受容の確か

(30) この問題に関し現時点で最も重要な研究は、Lawrance, J. N. H., "The Spread of Lay Literarcy in the Late Medieval Castile", in *Bulletin of Hispanic Studies*, LXII, 1985, pp. 79-94.

な証しであった⁽³¹⁾。そしてここから、対話、ピカレスク小説、「恋愛小説」(las novelas sentimentales) などの他の散文ジャンルが16世紀にかけて誕生していった。特に、「親愛書簡」の特徴のうち「真実に興味を添える戯れ(burla)を交えた機知(dotorina)あふれ(…)本当のこの間にかなりの戯れ(burla)が交じっている」種類の書簡は、A. ゴメス・モレーノ (A. Gómez Moreno) が指摘するように、書く側にとっては純粋な嗜好からものを書くという欲求を満たす行為であり、かつ、今日の「大衆」にあたるような不特定多数の読者の手に渡ることを想定されたものだった⁽³²⁾。書き手の最も純粋な欲求を満たし、かつ読者に楽しみを提供するためにもものを書くという行為は、後にカステリオーネ (Baldassarre Castiglione, 1478-1529年) の『廷臣論』(*Il cortesagiano*, 1528年) に理論化されるような人文主義・ルネサンスの理想から生じたものであった。さらにローレンスが指摘するように、書簡を契機とする文芸の大衆化によって「著者と読者の間に新しい親密感が生まれ、それが中世の詩における〔無人格な私〕を、特定の〔あなた〕に語りかける個人的な〔私〕に変化させた」とするならば⁽³³⁾、この「私」は「個人的な私」を装いつつも修辞学の規範で武装し、読み手の興味を満足させることに腐心する虚構性の高い「文学的な私」であり、「特定のあなた」は実は幅広い読者の存在を想定したものだだった。

以上に述べたようなカステイージャ語散文の発達に伴い、イタリアの諸都市国家が各々ナショナリズムを背景にして自国の文化を発達させたのと同様に、カステイージャ語の遣い手たちも自分たちの言語と文化を他に優越するものとする気運が高まっていた。それを象徴するのが、奇しくもコロンの第一次航海直前の1492年に出されたアントニオ・デ・ネブリハ

(31) Lawrance, “Nuevos lectores y nuevos géneros...”, pp. 88-90.

(32) Gómez Moreno, *op. cit.*, pp. 182-83.

(33) Lawrance, “The Spread of Lay Literarcy...”, p. 79. キッコウ括弧内は原文ではイタリック体。

(Antonio de Nebrija, 1444-1522年)の『カスティージャ語文法』(*Gramática de la lengua castellana*)である。イタリアに学ぶなどして人文主義の教養を完全に身に付け、すでに『ラテン語入門』(*Introductiones Latinae*, 1481年)、『羅西辞典』(*Dictionarium ex hispaniensi in latinum sermonem*, 1492年)などをスペインにおいて発表していたネブリハは、次いで俗語を称揚したのだった。そのイデオロギー的裏づけは、イサベル1世に宛てた『カスティージャ語文法』序文に以下のように展開されている⁽³⁴⁾。

(…)言語は常に帝国の伴侶であり、それと歩みを共にしたのです。両者は共に始まり、成長し開花を迎え、その後の衰退も共にしたのでございます。(…)カスティージャ語がその威力を示し始めたのは、(…)賢王アルフォンソ陛下の治世でありました。

ネブリハが言及しているのは、カスティージャ語散文創造の父と称されるカスティージャ王アルフォンソ10世(Alfonso X, 在位1252-84年)である。レコンキスタが大きく進展した13世紀前半にカスティージャ語はアルフォンソ10世の父フェルナンド3世(Fernando III, 在位1217-52年)によって公文書に使用され始めていたが、アルフォンソ10世は完全に公用語化し⁽³⁵⁾、さらにカスティージャ語で科学書、歴史書、法令集などを編纂させることによって、カスティージャ語を学術・文学書を記述するのにふさわしいものへと鍛え上げた。この編纂作業は、『大世界史』(*General Estoria*, 1272年ごろ編纂開始)の序文によれば、「王が(…)素材を整理し、修正し、

(34) Nebrija, Antonio de, *Gramática de la lengua castellana*, edición de Antonio Quilis, Madrid, Editorial Centro de Estudios Ramón Areces, 1989, pp. 109, 112.

(35) Cárdenas, A. J., "Alfonso's Scriptorium and Chancery; Role of the Prologue in Bonding the Translatio Studii to the Translatio Potestatis", in *Emperor of Culture. Alfonso X the Learned of Castile and His Thirteenth-Century Renaissance*, edited by Robert I. Burns, University of Pennsylvania Press, 1990, p. 95.

判断し、本が書かれるべき方向を示し、つまり命令して書かせた」のち、王自身が草稿の「余分な重複部分を削除し正しいカステージャ語に置き換えて、言葉に関して（…）自ら手を入れ」た³⁶⁾。この「正しいカステージャ語」への矯正とは、R. ラペーサによれば、1085年に奪回されたトレドヘクリュニー修道院出身の聖職者を送り込んで典礼および文化からイスラームの影響を除去しようと努めたフランスの影響下でカステージャ語に混入したフランス語風綴りを徹底的に修正しようとするものなどであった³⁷⁾。これらの文献は直ちに流布したのではなく王室文書局に保管され、直に手にすることができたのは王侯貴族や官吏に限定されてはいたが、編纂作業を根底で支えたのは強いナショナリズムであり、読者をカステージャ語使用者だと想定してのことであった³⁸⁾。

さらに重要なのは、法令集『七部法典』（*Las Siete Partidas*）に読み取ることができるアルフォンソ10世のナショナリズムの粋を超えたイデオロギーである。『七部法典』は、西ゴート王国滅亡後のカステージャに欠けていた統一法を編纂することを目的に、アルフォンソ10世治下で成立した4種の法令集のうち最も包括的内容のもので、書名のとおり7部構成になっている。第1部は法の定義、次いで教会および信仰について、第2部は支配者の権利および義務、そして大学について、第3部は司法関係、第4部は結婚などの人間関係、第5部は商法および海事法、第6部は遺言および相続、そして第7部は刑法、異教徒および異端についてである。地上におけるあらゆる人間の営みを包括的に定義したものだと言い換えてもよい。構成については「序文」において、数字の7に基づいているのはこれ

³⁶⁾ Solalinde, A. G., “Intervención de Alfonso el Sabio”, en *Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos*, tomo 12, 1905, pp. 286–87.

³⁷⁾ Lapesa, R., *Historia de la lengua española*, Madrid, Gredos, 1981 (5ª. reimpresión), pp. 239–42.

³⁸⁾ Cárdenas, *op. cit.*, pp. 50–51; Procter, Evelyn S., *Alfonso X of Castile*, Oxford University Press, 1961, pp. 3–4.

が「由緒ある (noble)」数字であるが故と説明される。その根拠としてまず挙げられるのが、天上界を頂点に7層(天, 元素, 人間, 人間以外の動物, 植物, 鉱物, 石)を成している世界の秩序である⁽³⁹⁾。つまり、アルフォンソ10世は『七部法典』において、地上に存在するあらゆるものを全宇宙とのアナロジーによって把握しようと意図したのである。ラペーサによれば、こうしたアルフォンソ10世の認識方法はもう1つの法令集『セテナリオ』(Setenario)においてより広範に展開されている。未完に終わった『セテナリオ』においては、占い, 魔術, 4元素(地, 水, 空気, 火)崇拝や惑星崇拝などの『七部法典』には見られない異教的要素が多く扱われている。これは、唯一絶対の神の存在を説き(第18項), 異教の知識によってはこの唯一神を知ることが不可能であるが、「イエス・キリストの真実かつ生ける法」によっては可能であることを証明する(第35項)ことを最終目的にした構成だった。つまり、『セテナリオ』の中軸を成す発想は、異教的崇拝行為を述べることによって宇宙のあらゆる事物に象徴性を与え、そこに神の創造の跡を見出すことである。さらにキリスト教信仰を他の事物への崇拝と並列的に述べることによって前者に普遍性を与えると同時に、これを他よりも純粹で高次の概念にまで称揚している。こうした全宇宙の把握方法、つまりキリスト教の下に異教的解釈による宇宙もが統一されるという発想が、アルフォンソ10世のすべての行為の基底をなしていたのである⁽⁴⁰⁾。

話をネブリハに戻そう。アルフォンソ10世が展開した全宇宙における秩序確立の構想は、『カステージャ語文法』序文においては、地上的規模のものに縮小している⁽⁴¹⁾。

(39) Alfonso X el Sabio, *Las Siete Partidas*, tomo I, edición de la Real Academia de la Historia, Madrid, Imprenta Real, 1807, pp. 6-7.

(40) Lapesa, R., "Símbolos y palabras en el *Setenario* de Alfonso X", en *Nueva Revista de Filología Hispánica*, n.º 29, 1980, pp. 247-55.

(41) Nebrija, *op. cit.*, p. 113.

サラマンカにおいて私が陛下（イサベル1世）に本書の草稿をお目にかけて、陛下から私に本書は何の役に立つのかとご下問があった折、アビラ司教様が私がお答えるのを遮って私の代わりに次のようにお答えになりました。曰く、陛下がその支配下に多くの野蛮なる民や言葉の異なる国々をお治めになる暁には、その勝利によって、それらの民や国々は、勝者が敗者に課す法を、そして法と共に我らが言語を受け入れる必要に迫られましょう。その際に、私のこの文法書によって、敗者たちは我らが言語を習得することができるのでございます。

「野蛮なる民や言葉の異なる国々」とは、インディアス発見ではなくグラナダーダ戦役や北アフリカ遠征を念頭に入れて言及されたと推測される⁽⁴²⁾。そして、ネブリハに代わって答えたアビラ司教とは、イサベル1世の聴罪司祭でもあったヒエロニムス会士エルナンド・デ・タラベラ（Hernando de Talavera）のことだが、彼はかねてよりイサベル1世とネブリハの仲介役となっていた。ネブリハが受け入れて序文に取り入れたタラベラの発想の源は、同時代の実情に裏打ちされた実際のものだった。「言語は帝国の伴侶」という理念は、カステイージャに約束された異教徒に対する軍事的優越を背景に、外国語に対するカステイージャ語の優越性の主張へと具体化している。ネブリハに象徴的な俗語の優越性の主張は人文主義者の間でも活発に行われていた。ラテン語を共通語とする人文主義者たちは、留学、外国の宮廷や教皇庁への派遣といった機会を通じて知識の授受や交流を行うと同時に互いに反発も抱くようになり、それは俗語をめぐる優越性の主張合戦へと発展していった。14世紀から15世紀にかけての人文主義者たちは往々にして、その著作において外国人に対する嫌悪感を洗

(42) Asensio, Eugenio, “La lengua compañera del imperio. Historia de una idea de Nebrija en España y Portugal”, en *Revista de Filología Española*, XLIII, 1960, p. 407.

練された文体を駆使して表明した。イタリアとスペインの間についていえば、例えばジョヴァンニ・ポンターノ（Giovanni Pontano, 1422-1503年）はその著書の中でスペイン人を「野蛮人」と呼び、アラゴン連合王国の領土となっていたナポリに蔓延るあらゆる悪癖をスペイン人に由来するものだと決めつけた⁽⁴³⁾。

カステイージャ語称揚の最たる例は、1498年に教皇庁へ使節として派遣されたガルシ・ラーソ・デ・ラ・ベガ（Garci Lasso de la Vega）がアレクサンデル6世（Alexander VI, 在位1492-1503年）の前で行った演説である。この演説においてベガは、フランス語、ポルトガル語、イタリア語と比較してカステイージャ語が最もラテン語に近く、それ故に最も優雅で雄弁術に用いるにふさわしいと主張した⁽⁴⁴⁾。同様の主張は、1484年からアラゴン宮廷に仕えたシチリア出身の人文主義者ルシオ・マリネオ・シクロ（Lucio Marineo Sículo, 1444?-1536年）によってもなされた。古典古代のギリシア語原典に通じていたマリネオ・シクロは、カステイージャ語には他の言語よりも多くのラテン語・ギリシア語の語彙が含まれているゆえ、イタリア語にも増して正統的で優雅な言葉だと主張した。ただしこれはアラゴン連合王国の御用学者としての表向きの見解であり、マリネオ・シクロは私的書簡においては必ずしも同じ態度は示さなかった⁽⁴⁵⁾。こうした政治的配慮は、1487年からカステイージャ宮廷に仕えたP.マルティル・デアングレリーアにも顕著に見られる。マルティル・デアングレリーアも公的には他国に対するカステイージャの優位を主張しながらも、私的書簡においてはイタリアと比較してのカステイージャの文化の遅れに不満を隠さなかった⁽⁴⁶⁾。

(43) Gómez Moreno, *op. cit.*, pp. 124-25.

(44) *Ibid.*, p. 117.

(45) *Ibid.*, pp. 118-19.

(46) *Ibid.*, pp. 145-46.

以上のように15世紀のヨーロッパ各国は、外交関係における優位獲得を目指し、古典語への近似性を根拠として、自国の文化と言語の優越性を活発に主張した。それは古典古代からの連続性を根拠とする自国語の正統性の主張、そして当代にあっては普遍性の主張に他ならなかった。さらに、アラゴンとカステージャに見られるように、各国はこの俗語をめぐるイデオロギー闘争の論客として人文主義の本拠地イタリアから迎えた学者を擁し、彼らのお墨付きをもらうことにより、自国語の優越性を普遍的なものにしようとしたのであった。この趨勢は大航海時代の諸事業にも見られた。ポルトガル王の許可を受けたナバーラ人のイエズス会士フランシスコ・ザビエル（Francisco Xavier, 1506-52年）による東アジアへの布教や、スペイン王の後見により世界周航に乗り出したマガリャンエス（Fernão de Magalhães, 1480-1521年）がポルトガル人だったことを思い出せばよい。一国の海外進出事業は国際的陣容をもって着手され、その成果はパトロンの俗語によって人類史上もっとも卓越した出来事として書き残されたのである。そして次章で述べるように、このような俗語の台頭と緊密な関連を持つナショナリズム、そして自国語と文化の優越性・普遍性の主張が最も顕著な形で現れたのは、俗語による歴史記述と歴史書の編纂においてであった。